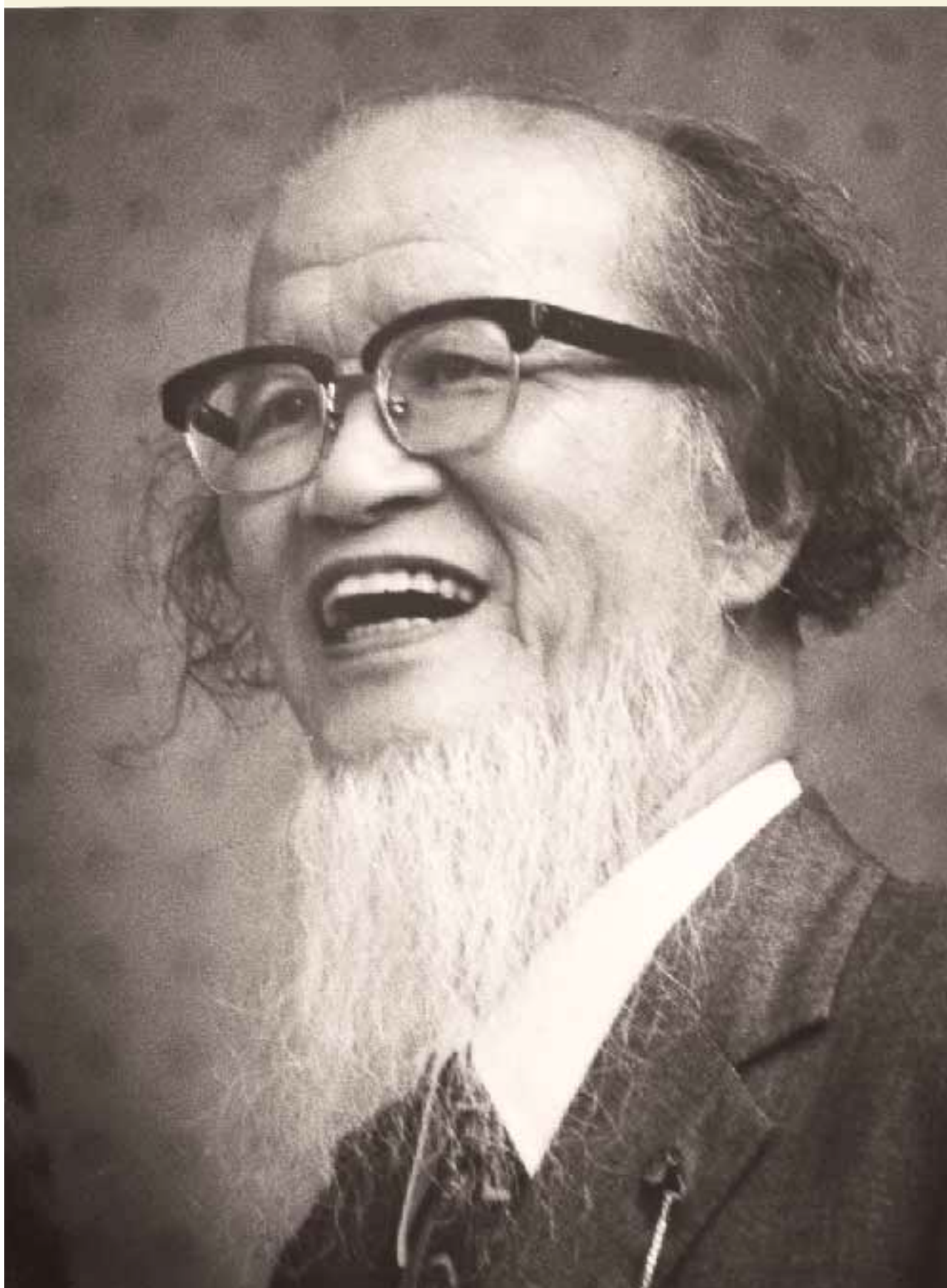


第一章 人間・荒木の源流



創設者・初代総長 荒木 俊馬

1 佐々友房と井芹経平

濟々躰で学んだ「和魂洋才」

熊本市碩臺せきだい小学校から旧制中学校の濟々躰せいせいこうへ。中学校長の父、竹次郎(東京高師卒)は荒木俊馬先生(1897 - 1978)が小学校を出た明治40(1907)年、39歳の若さで急逝した。

母の記きじ考は幼稚園教師の職を得て、俊馬としま、千里ちさと(五高 - 京都帝大医学部卒。京都帝大医学部教授)、亨とある(五高 - 京都帝大理学部卒。満州医科大学教授)の三兄弟を育てた。先生は熊本の名門中学、濟々躰へ進んだ。

その中学生活は「人間の土台は旧制の中学校を出るまでに築かれる。そのあとの教育は成長に見合った骨格づくりと肉づけである」という教育観の骨格になった。大正4(1915)年、広島高等師範学校理科へ進み、天文学者の道を歩み始めた。

先生は明治40年に小学校を卒業している。10歳である。秀才であったから飛び級した、というわけではない。当時は、小学校は四年制で、卒業の年に学制変更があり、六年制に延長になる。

中学校の入学試験に1回、失敗。熊本高等小学校に通い、再挑戦して濟々躰で5年間、学んだ。

濟々躰は、教育県と言われて来た熊本で最も古い歴史をもつ中学校(旧制。現在は県立の高等学校)である。「徳体智」の三育を調和させた全人教

育を建学の理想に掲げて、実に120年の歴史を刻んでいる。

『この学校は極めて特殊な存在であった。人をつくる学校なのであった。佐々友房の建学の理念に従い、西洋学術のみに依存することなく、新時代の東洋平和と文化のために献身する志士こそが将来の日本には最も必要であり、かかる人材の養成を主眼としたものようである』という先生の述懐をもとにして『人としての土台が築かれた』という濟々躰教育の素顔を見て行きたい。

明治12(1879)年にさかのぼる。西南の役で西郷軍に加わって敗れ、獄舎にあった佐々友房らが郷里の熊本に戻って、無月謝無報酬で「国家社会に有用な人材の薫陶」をめざして私塾「同心学舎」を創立した。濟々躰の前身である。

佐々によると、明治維新のあと、鎖国の中の停滞を取り戻そうとして、わが国は教育について知育偏重、人生の目標について立身出世、に重点を置く功利主義的な風潮をつくり上げていた。先人の培った日本古来の美しい伝統的なものの考え方が、次第に影の薄いものになろうとしていた。

佐々は、西洋の科学技術をはじめとする新知識は、まことに重要であるから、これを学び身につけて行くことは、わが国の若人にとって欠かすことはできない、しかし日本の伝統に培われた「魂」を失ってはならない、と考えていた。



先生の父 竹次郎



濟々躰時代の荒木俊馬先生(右)

明治20(1887)年、わが国初の文部大臣であった森有礼が、近代日本の百年の大計にふさわしい教育づくりを模索して九州巡視の途中、佐々の濟々巖を訪れた。森は校舎に入ろうとして、教室の周りにズラリと吊り下げられた草履に目をとめた。毎週のように、生徒が野や山へ体の鍛練に出掛ける。冬はウサギ狩り、夏は水辺に行く。「毎月五里以上ノ地二遠足ス」の校則があると聞いて、深く頷いた。

授業開始。生徒の代表が書見台に向かい、森に進講するのであった。教師が知識を生徒に教え込む形式ではなく、教師の説明をもとにして、生徒たちがそれを噛み砕いて理解し、自らの考え方として血として肉として行こうという姿勢が、そこには示されていた。

進講のあとは、校庭で名物の集合撃剣。生徒が二派に分かれて、掛け声も勇ましく竹刀を振って校庭狭しと駆け巡る。

森は、このような教育の現場を見て「これこそが私の理想として描く教育である」と感動、全国知事会議などで激賞した。九州に五高(旧制。熊本大学の前身)が置かれることになったのは、熊本の教育を高く評価した森の推薦によると伝えられている。

巖長の佐々は、敷地のなかに住み、生徒たちにその一部屋を開放し、終日、話して、倦むところがなかったという。濟々巖百年史に生徒のひとりの思い出話が紹介されており、「深夜零時を過ぎて、そろそろ退散しようとする、巖長から“なんだ、もう帰るのか”と言われた」という話が記されている。

初めは全寮制であり、熊本市内に親元のある生徒は、食事のときだけ自宅に戻って、あとは校内で生活する5年間。

飲食行住座臥を、血気盛んな若者たちが共にし、自活の精神を養う。そこから個性豊かな社会人がつくり出される。佐々の考えであった。

佐々はつねづね「濟々巖は、知識を受けるところではない。根底になる底力をつくるのが主眼である。めいめいは、その底力をもとにして、自らの(個性に見合った)知識をもとめ、あるいはことにあたるのである」と述べたという。

日本人としての精神文化の涵養と、その価値観に基づく全人教育こそが、濟々巖のもともめるところであったようである。この「日本人として本来、備えているべき精神文化」は、師弟の心の触れ合いのなかに流れ、伝わって行く、というのであった。こうした教育観は、その後に開校された旧制



現在の熊本県立済々巖高等学校



同巖正門内の創設者佐々友房像



荒木先生在巖中の井芹経平巖長像

五高においても教学の背後に流れる理念として受け止められていた。

俊馬先生の生年にあたる明治30年の旧制五高第七回開校式典で夏目金之助(夏目漱石)教授は次のように祝辞を述べた。「ソレ教育ハ 建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ 育英ノ大本タリ 師ノ弟子ヲ遇スルコト 路人ノ如ク 弟子ノ師ヲ見ルコト 秦越ノ如クンバ 教育絶エテ 国家ノ元氣沮喪セム」

教育の理想像

俊馬先生の描いた理想の教育は、その骨格において、先生の学んだころの濟々費にびたりと重なる。俊馬先生が学んだ明治末から大正初年にかけて、濟々費には佐々の教育精神である徳体智の三育併進を信奉して実践する優れた後継者たちが多かった。佐々の精神を受け継いだ五代費長・井芹経平は、教育界において大臣級の人物との評価が高かったが、費長を天職として動かさず在職四半世紀にわたった。

俊馬先生の中学時代を通じての費長であり、豊かな将来を持つ教え子として終生、変わらない愛情を先生に注いだ。決して身体強健ではなかった先生ではあるが、井芹の温かな励ましを受けて、山野を跋涉し、海や川に遊び、雪中行軍の先頭に立って身心を鍛えた。

俊馬先生が京都産業大学創設の決意を固めた時代背景を見ると、佐々友房(のち衆議院議員)が同心学舎を設立した頃のわが国の状況と似通ってい

ることが目にとまる。

西南の役を経て、国内は維新政府の手によって次第に落ち着きを取り戻して行くのであるが、200余年の鎖国を解いたわが国は、西欧に目を向ければ、遙かな後進国に過ぎないことに気づく。列強は新しい植民地増営をはかってアフリカ、アジアに強力な軍事力を持って侵略しようとしていた。

追いつき追い越せ。富国強兵の国策に国を挙げて走り出す騒然としたなかで、佐々のような具眼の士は、日本の将来を憂いていた。

欧米の真似事に巧みなだけの人たちに国の将来を任せてはおけない。百年のち国の土台になる人材を育てる。そのために、教育はあらねばならない。西欧諸国から知恵を借りているのは良いとしても、魂までも、よその国からの借りものであってはならない。それが佐々の基本的な考えであり教育に臨む姿勢であった。

昭和40(1965)年、京都産業大学が創設された前後のわが国もまた世情はきわめて騒然としていた。「70年日米安全保障条約改定」を前にして、体制維持を不満とする勢力があり、教育の現場では学園紛争として火を噴いた。

「象牙の塔」と揶揄されたように、大学の自治、研究の自由をうたいながらも権威主義に陥っていた大学に対して、新左翼と呼ばれる学生集団などが大学解体を迫って蜂起した。

東京大学や京都大学が「権力の頂点」として攻撃的になり、やがて全国の大学のキャンパスに血なまぐさい風が吹いた。



五高教授時代の夏目漱石の旧居



過激学生の一部が大学を占拠し、封鎖解除の要請で出動した警官隊に火焰ピンを投げて抵抗。東大は昭和44(1969)年度の入試を中止、各大学で教授会の改革案が示されるなどの騒ぎになっていた。「戦後の教育の欠陥が露呈された」という見方があり、一方で、過激派学生に同情的な論調の文化人への風当たりも険しかった。

若者たちに対してどんな日本人に育てほしいというのか。百年後を託すに足りる人材を育てようとする気概がいまの大学のなかにはみられない。道義の衰退、若者の無気力、個性・創造力・自主的活動力の喪失...知育偏重の弊害から抜け出して、全人教育によって、急速に進展している世界のなかで、自らの信念を主張できる底力のある

人材を育てること。

先生は、佐々友房が濟々齋をつくって新しい日本への期待を実現しようとした精神と酷似した考えをもって、本学を創設したのであった。

本学の建学の精神を見つめるとき「私の精神の骨格は小・中学校時代に形づくられた」という先生の述懐の輪郭がくっきりと浮かんでくるようである。

「日本古来の美しい伝統を心にした人」どのような科学技術の進歩にも対応できるだけの底力を持った人」「世界の舞台に出てどこの国の人からも尊敬されるにふさわしい日本人」...そうした人材づくりをめざした『建学の精神』は、学祖・荒木俊馬先生の精神の奥深くから湧き出たのであった。

2 孫 文

憂国の士を仰ぎ見る

明治45(1912)年早春、中国から清朝打倒運動にあたった革命家の孫文(孫逸仙)が熊本の濟々齋を訪問した。

孫文来る。新聞や雑誌にその動静を細かに報道されている人物との出会いに生徒たちは感激した。教師の指示で、齋門の内側に生徒が二手に分かれて出迎えた。二人曳きの人力車に乗って、お付きの行列を従えた孫文が到着した。同行者のなかには、卒業生の宮崎滔天が豪傑ヒゲを生やし羽織袴に包んだ身体を堂々と運んでいた。それに比べると孫文は中肉中背である。革命党の大立者だからと、巨軀を想像していた生徒たちはあてがはずれた思い。



孫文

孫文は井芹齋長をはじめ教職員とともに講堂で懇談し、井芹から長船勝光の古刀を贈られた。ついで教室や寄宿舍を視察、運動場で同齋名物の集合撃剣を見学した。全齋生が東西二軍に分かれ、面小手をつけて陣太鼓の鳴り響くなか、トキの声を上げながら竹刀で戦う模擬合戦である。

このあとは校庭のバルコニーに立ち、生徒たちに向かって「本校の規模広大、設備完全なるは諸君のためによるこぶべし。貴国民は愛国心にとみ、これを拡大して同種同文の国を愛する公大なる思想を有せり。今日、それを確信す」「わが東洋の諸国、大いに連合和合して、白色人種に対抗して黄色人種の氣勢を示さざるべからず。諸君勉強怠りなく、この世界的大競争場裡において優勝者たるの覚悟を決め、技量を養成せざるべからず」と述べて、満足の表情を湛えて去った。俊馬先生にとっては演説だけでなく『音楽的なピアノの演奏みたいな独得の抑揚』の中国語も魅力的であった。とりわけ『(滅清興漢)志を遂げ得たことは、全く貴国民の理解と同情と援助があったからである。しかも生死を共にして活動した同士のなかには貴齋出身者が少なくない。本日、その母校を訪れ得たことは、まことに名誉、欣快、感無量』という言葉は、先生をはじめ全齋すべてを感激させた。「孫逸仙先生萬歳」「中華民國萬歳」の合唱が響いた。

『その頃の私にあっては、思想のようなものが心のなかに漸く形成せられ始めている、あるいは沈澱しかけているとでもいったような年頃であった。思想といえるほどのものではなくて、ずっと

後になって獲得した認識のなかに、あるものが混ざり込んでくる、とでもいったような。しかし、当時の、あのくらいの年頃の少年にしては、しかも中国の事柄について、大きな関心をもった者は少なかったのではないか。革命とは何か。民族とは何か。そういったことにはっきりした概念などのない頭脳の一少年にしては、これは不思議なことだ』と後年になって先生は語っている。

それに叔父の死があった。母方の叔父である浦順平が、父竹次郎の死後しばらくして広東の高等師範学堂(学校)へ教育学の教授として赴任したあと急死、そのときの叔母の話で広東が猛烈に暑いところだとか、学校の先生の所へ生徒からの賄賂が届くような習慣があるとかの話が聞かされていたことも、中国への強い関心を持った背景であったのかも知れない。

そのころの濟々費の教師にはユニークな人物が少なくなかったようである。地理の時間に、中国

大陸の直近の情勢を講義する人もいた。「清朝打倒の革命は、日本における明治維新に似て、正義のもとの戦いであり、東洋平和の基礎的理念」であると注釈する教師がいた。そのころの濟々費の生徒たちにとって、孫文という名前はナポレオンや豊臣秀吉と同列に聞こえていたのである。そうした知識のなかで1911年、南京で臨時大總統に就き、清朝打倒の運動に成功したあと袁世凱えんせいがいに後を譲って、日本にやって来た孫文であった。なぜ、いま熊本に、そのような巨星が現われたのか。しかもなぜ濟々費に。きっと、すばらしい先輩がいて、著名な井芹費長の存在があるからだ。面くらい、感激する俊馬先生であった。

後年、先生は天文学者として、恩師の新城新藏教授の遺志を継いで暦学の研究と指導のためにしばしば中国を訪れ、この国に対して並々でない関心を示している。濟々費時代の孫文來費の記憶が呼び起こされたのであったろうか。

3 新城新藏

天文学を志して

京都御所の北、京都市上京区塔之段藪下町は、京都の名刹・相国寺の東に広がる住宅街である。維新前からの公家屋敷があり、閑静なたたずまいに魅かれた京都帝国大学や同志社の教授、文化人の住まいが並んでいた。

大正10(1921)年初秋、その塔之段の一角にある京都帝国大学の新城新藏教授の応接室で、俊馬先生は緊張した面持ちで教授の現われるのを待っていた。この年から学期始めが4月に変わり、二年生になっていた。ドイツ留学を終えて、世界の最先端の天文学、物理学の知識を吸収して帰国した新城教授が中心になって、宇宙物理学教室を、物理学教室から独立させた直後にあった。

先生は広島高等師範学校に学んだころから天文学に関心を抱き、新設の宇宙物理学教室へ転科の希望を打ち明けるために訪れたのであった。しかし、新設の学科だから学生は恐らくはひとりきりであろうから、転入するということは、人生をその教室に埋めることになる。初対面になる新城教授はどんなお人柄であろうか。天文学者というからには鶴のようにやせた、浮世離れた方なのか。物理学科にこのまま在籍していたら、悪くいってもどこかの高等学校教授の口はあるだろうが、天文学をやって将来、生活ができるのか。

玄関に入ってすぐの階段を上った二階の応接室に通され、正座して待っている頭のなかで、希望と不安が交錯した。

ミシ、ミシ。階段を上って来る足音に緊張する。するりと障子を開けて、教授が室内に入った。意外な思いを抱く。やせていない。堂々とした恰幅、久留米がすりの着物姿、端座して「新城です」と丁寧な挨拶。やがて義理の父子になり、日本の宇宙物理学、天文学の研究の先頭に立ち、手を携えて行くことになる、ふたりの出会いであった。

教授は、妻わかを前々年に肺結核で亡くしたが、まだ50歳前。額に、入江のなかの半島のような黒い髪の毛を残し、八の字ヒゲを貯えていて、間もなく京都帝国大学総長に就く威厳を全身に漲らせていた。声は優しかった。「宇宙物理学をやりたいと言うのでしたね」。口数は少なかったが、質問に対して短いが要点を押さえて誠実に答える。対座は約1時間。話が途切れることはあったが、一学徒の将来への思いやりに満ちた口調が、先生にとって魅力であった。「この方こそ、私の師事する方だ」。これから一生、天文学をやって行こう、生活のことなど考えずにやって行こう。そう心に決めるには十分な1時間であった。

転科を許されて授業に通うようになってみると、予想したように初の宇宙物理学教室の学生はただひとりであった。新城教授の授業には、ほか

に物理学科からの受講生がひとりかふたり聴きに
来るだけだから、息を抜けなかった。冬の朝の下
宿から大学に出掛けるのが辛いこともある。だが、
休めば、新城教授の授業が開けない。休むわけに
はいかなかった。

宇宙物理学演習は、海外の最新論文の講読だが、
一年先輩で卒業目の川崎俊一が休むと、演習の
受講生はひとりきりになる。それでも講義に手を
抜く新城教授ではない。俊馬先生の解釈を熱心に
聴き、要点を指摘し、新しい研究テーマを示唆す
るといった指導に全力投球するのである。「私ひ
とりのために」との感謝の思い。ひとの心に敏感
に、しかも強烈に、反応する性格の先生にとって、
人生意気に感じる貴重な2年間であった。

卒業して直ちに講師、翌年から助教授として宇
宙物理学の講義を担当した先生が、やはりふたり
か三人の学生のための授業について綿密な講義計
画を練り、教授法に心を砕いたのは、恩師の教え
を忠実に守ったものといえよう。

そのころの宇宙物理学教室は、いまの京都大学
正門に入って左側にあった尊攘堂の裏側で、小さ
な木造の校舎。教授室は図書室兼用。学生の控え
室との境の扉は、いつも閉まっているというわけ

ではなく、書物を読みたいときには、学生は教授
室に自由に入出入りしていた。その部屋の主は、西
陽をいっぱいを受けても端然として論文に読み耽
って、倦むことがなかった。その姿が、学生に、
学ぶということの真剣さを無言で伝えていた。

そうではあっても、教室は和やかであった。冬
になると、控え室の大きなストーブを囲んで、学
生たちは学問の世界を離れて人生の悩みを語り合
い、愛について打明けたりした。教授はニコニコ
と若者たちの言葉に耳を傾けた。

新入生の歓迎会や卒業の送別会のたびに新城教
授と仲の良い志田順教授の地球物理学教室と合同
で、近郊へハイキングに出掛けた。酒を汲み交わ
して、ひとときの談笑を楽しむ。酒を飲めない新
城教授ではあったが、中座することはなく、最後
まで同席した。

清滝への遊びの帰り道、ひとりひとりがダンダ
ラ提灯をぶら下げて新城教授を囲んで山道を歩
き、師弟の和を固め合った。

後年、京都産大総長に就いた先生は、学生たち
の誘いを受けると、時間の許す限り出掛けて、夜
を徹して話し合った。その光景が、新城教室のそ
のころと重なるのである。



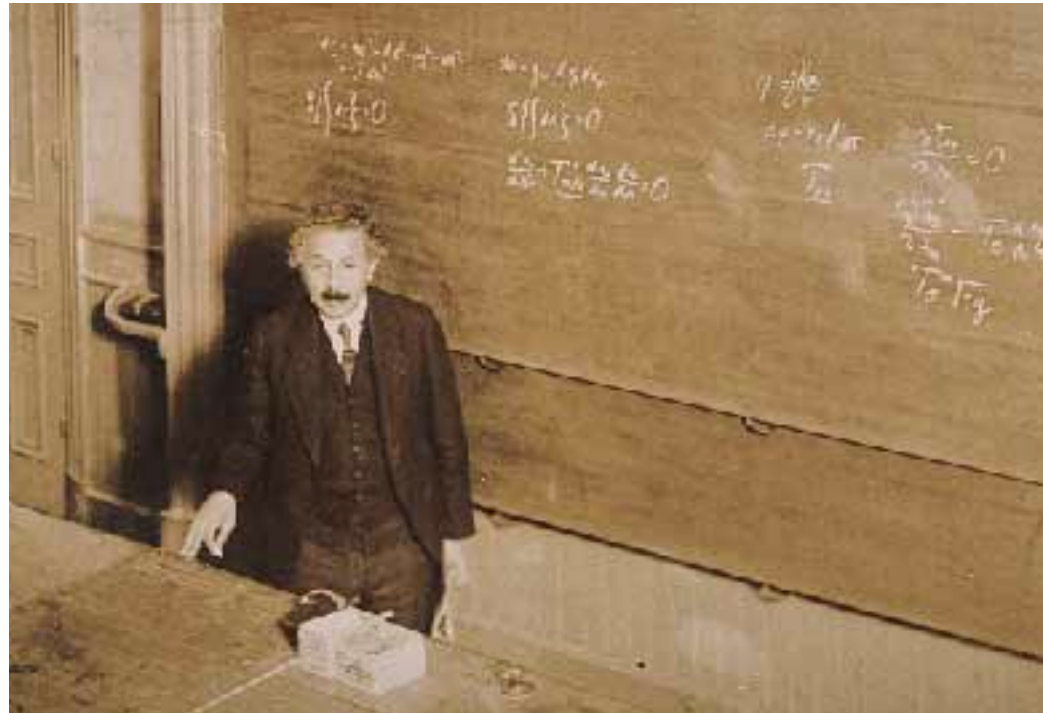
京都帝国大学総長も務めた宇宙物理学の創始者の新城新蔵博士

明治6(1873)年、会津若松で誕生。若松中
学、仙台二高から明治28(1895)年、帝国大
学理科大学(東京)物理学科卒業。明治33
(1900)年、京都帝国大学理工科大学助教授、
ドイツ留学(明治38年1月 - 40年8月)のあ
と直ちに教授。明治42(1909)年、理学博士。
大正12(1923)年、京都帝国大学理学部長(-
大正14年12月)、昭和4(1929)年、京都帝国
大学総長(-昭和8年3月)、のち名誉教授。
昭和10(1935)年、上海自然科学研究所所長、
昭和13(1938)年8月、逝去。おもな著書は
『宇宙進化論』『天文大観』『最近宇宙進化論』
『迷信』(以上、大正年間)、『宇宙大観』『東洋
天文学史研究』『こよみと天文』(以上、昭和
初年)など多数。

博士は、田中館愛橘、長岡半太郎両教授
にしたがい、日本列島、朝鮮半島で地磁気
の詳細な測定を実施。中国大陸にも観測の
輪を広げた。昭和11年の皆既日食時に地磁
気の変動を観測させるため荒木俊馬博士を
黒龍江畔へ派遣した。

東洋の天文学史研究は世界的な評価を得
た。『漢籍に見える天文現象を抽出して、歴
史事件の年代を推定する「年代学」を確立。
この手法は能田忠亮、藪内清らの東方文化
研究所の天文学史グループへ引き継がれた』
と、されている。学問上の反対意見に対し
て「ただ途を異にして、同一の山嶺に向かっ
て進んでいるのである。他日、山嶺で握手
する日の早からんことを望む」と述べる大度
量の人であったという。

4 アインシュタイン



東京帝国大学で講義するアインシュタイン博士

物理学界の潮流

京都帝国大学理学部に新設された宇宙物理学教室の主任教授として担当を始めた新城教授は、初の講座学生である俊馬先生を迎えて後継者として教室の将来を託すことになる。新城教授は地磁気と測地学あるいは東洋天文学史の研究で多くの論文を発表。業績は世界水準で評価されていたが、物理学、宇宙論を含めて自然科学全般に幅広い関心を示す科学者であった。

大正11(1922)年秋、ニュートンによって確立された古典物理学に疑問を抱いて新しい物理学に道を拓き相対性理論を提唱したアインシュタイン博士が来日した。

教授は俊馬先生に声をかけた。「アインシュタインの理論を直接に聴くこと。偉大な学者の醫咳に接すれば、得るところは大きいだろう」。東京帝国大学物理学教室の中央講堂で、当時の日本を代表する物理学者や新進学徒、学生を対象にした6回の特別講義(11月25日 - 12月1日)に、教授は京都帝国大学の学生として、ただひとり俊馬先生を同行させた。天文学、宇宙物理学の分野で、わが国の学界の先頭に行くことになる先生の将来にとって、この自然科学界の巨人との出会いは運命的であった。

後年になって、京都産業大学の開学のあと、先

生は世界から碩学を招いて、教職員と学生に講演を聴く機会をしばしば、つくった。

偉大な学者、文化人、知識人を身近にみて、その本人自らの口で語りかける言葉を吸収する。それが更なる知識欲、研究欲をかきたて、若い学徒の豊かな未来の糧になるであろう。アインシュタインとの出会いをそっくり「わが同志」である、京都産業大学の学生をはじめとする構成員への贈り物にしたい。その思いからであった。

『アインシュタイン博士が(この年の暮れ)京都に来て、京大講堂(京都帝国大学法学部中央大講堂。12月14日)で講演会がありましたとき、私が学生総代で歓迎の辞を述べた。今にして思えば、まことに冷や汗の出る話ですが、一所懸命に辞書を引っぱって独逸文を作り、それを前の日に何べんも読んで暗誦したのですが、その時なども(新城教授が)いろいろ親切に、文章や発音をなおしてくださったのを覚えています』(荒木俊馬著『狐狸窟瓢論 嶠山遺珠』の「アインシュタイン博士の想ひ出」ほか)

冷や汗ものだったという挨拶文の原文が荒木家に伝わっている。広島高等師範学校の生徒のころ、東京へ国内留学して学んだ得意のドイツ語である。「非の打ちどころのない立派なドイツ文」という評価がアインシュタイン日記に記されている。晩年の先生は、この話を京都産業大学の学生たち

に好んで話した。「語学で人生が変わることがあるかも知れない。若いうちに寸暇を惜しんで、覚えなさい」。そう忠告してエピソードを結んだのであった。

アインシュタインが特殊相対性理論を唱えたのは1905年、一般相対性理論を論文にしたのが1915年である。19世紀の終わりごろから20世紀の入口にかけて、物理学界は、ニュートン力学で解けない、いろいろな問題に立ち向かっていた。

なかでも光の性質が難題であった。ニュートン力学では、波の性質をもつ光を伝えるには、媒体(エーテル)が必要であった。たしかに音は、空気とか鉄といった媒体がないところでは、伝わらない。しかし光は、真空中でも伝わるのである。宇宙を光がどこまでも伝わって行くのであるから、宇宙にはそのエーテルが満ちているはずである。光の速さは、エーテルに対して一定であれば、たとえば公転運動する地球の「動いて行く向き」と「それに正反対の向き」とでは、光の速度に差ができるはずである。ところが現実の光の速度(秒速約30万キロメートル)は、いつでも、どこでも変わらない。とすれば、エーテルの存在は否定されなければならない。なぜ、光の波が伝わって行くのか。ニュートン力学の謎であり、限界がそこに、のぞいていた。

光を含めた電磁気学の分野で、19世紀末の旗手はイギリスの物理学者マクスウェルであり、彼は「運動物体での電磁気学」のなかで、ニュートン力学の矛盾に対する解明の糸口をつかんで行く。マクスウェルの電磁気学における解釈を、すべての物理現象にあてはまる新しい物理学理論へ展開し

たのがアインシュタインであったとされている。その相対性理論は量子力学とあいまって、現代物理学を発展に導き、ビッグバンに象徴される新たな宇宙論へ進んで行く。

夜空に天体望遠鏡を向けると、無数の星の群れが視界に現われて来るように、物理学は次々に新しい現象を見つけ、その解釈を打ち出し、発展を遂げて行く。物理学は、新しい宇宙像という輝かしい星をみつけたし、原子爆弾につながるバンドラの箱を開けることにもなる。混沌としたなかにも、物理学の大発展時代、それが若い日の先生の学究生活を彩った学界の動向であった。天体の運動とか地上における物理法則といった、すべての現象にあてはまる新しい学問がみつかった時代、と言い換えることができよう。

先生は広島高等師範学校生徒のとき「マックスウェルの電磁気学」を素早く取り上げて、独文による卒業論文をものしている。さらに俊馬日記をたどると、京都帝国大学の学生時代から昭和20(1945)年の終戦までの間、エディントン、ジーンズ、ローレンツ、ポアンカレ、プランク、ミンコフスキー、ラザフォードら、この時代の最前線にいた一流学者の論文、著書を殆ど取り寄せ原文で読んでいたことがわかる。

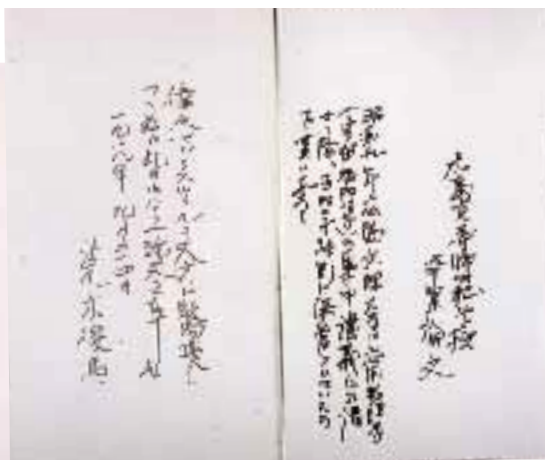
相対性理論

ヨーロッパを戦火に包んだ第一次世界大戦のなかで、スイスの特許局技師であったアインシュタインの発表した一般相対性理論について、評価は大きく割れた。

イギリスのケンブリッジ大学教授で、当時一流の天文学者であったアーサー・スタンレイ・エディ



マクスウェルの電磁気学を主題にした
広島高師の卒業論文(独文)の表紙



卒論の裏表紙に記された先生の『マクスウェル』称賛の一文(左)
昭和9年、広島文理大へ集中講義に出掛けた荒木先生は、懐かしいわが論文が保存されているのをみつけて、許可を得て自宅に持ち帰った。その経緯がこの論文の一隅に記されている(右)

ントンは、高い評価を与えたひとりであった。

やがて大戦は終わった。1919年5月29日、皆既日食がみられる。アインシュタインが一般相対性理論の例証として挙げた三つの予言(水星の近日点移動・光の太陽近辺での屈曲・重力場における光スペクトルの赤方偏移)のうちで「光の太陽近辺での屈曲」を検証することができる。日食観測隊を2班に分け、エディントン自らギニア湾のプリンシペ島へ、もう1班はグリニッジ観測所長フランク・ダイソン卿を隊長に、ブラジルのソブラルへ向かった。両隊ともに写真撮影に成功し、解析にとりかかった。

1919年11月7日の朝、目覚めたアルベルト・アインシュタインは、自分が一躍、世界の有名人のひとりになったことを知った。ロンドンの「ザ・タイムズ」がエディントン、ダイソン両隊の解析結果によって、太陽のそばを通り抜けて地表に届いた光が大質量の太陽によって曲げられていたこと、その屈曲はアインシュタインの予言を裏付けていたことを掲載。「科学の革命、宇宙の新理論、ニュートンの考え覆される」の見出しで伝えたからであった。

予言が立証されたことは、すでに9月27日、オランダの物理学者H.A.ローレンツから知らされていたが、ザ・タイムズの報道によって世間は科学

界の新しい英雄誕生に、熱狂的な眼差しを向けた。1919年11月号の「ベルリン画報」は表紙いっぱいをつかってアインシュタインの顔を載せた。相対論に因んだ「レラティヴィテート」という名のタバコが売り出され、赤ちゃんに「アルバート」の名前が氾濫した。1921年に発行されたアインシュタイン著『特殊および一般相対性理論について』の日本語版は、重版を重ねた。

その提唱者の来日である。俊馬先生ら日本の天文、物理学徒への刺激は強かった。第一次世界大戦で戦勝国側に加わっていた日本は、それまでの債務国から債権国へ立場を変えていた。国威発揚を賛美する声がひととき強まった。戦勝日本を背負った軍部、それと結んだ財閥の力が一体になって、わが国は独占資本主導の道を歩み始める。それに対抗して大正デモクラシーの波が高まって、支配層と被支配層衝突の政治的・社会的構図ができあがっていた。

日本郵船の定期貨客船、北野丸でマルセイユを発ったアインシュタイン博士が、途中でノーベル物理学賞受賞の知らせを受けながら40日間の航海のち神戸港に着くと、ヨーロッパに始まった新しい文化の光を放つ巨人をひと目みたいという大正の文化人、知識人が歓呼して出迎えた。

わが国物理学界の頂点に立つ長岡半太郎(東京



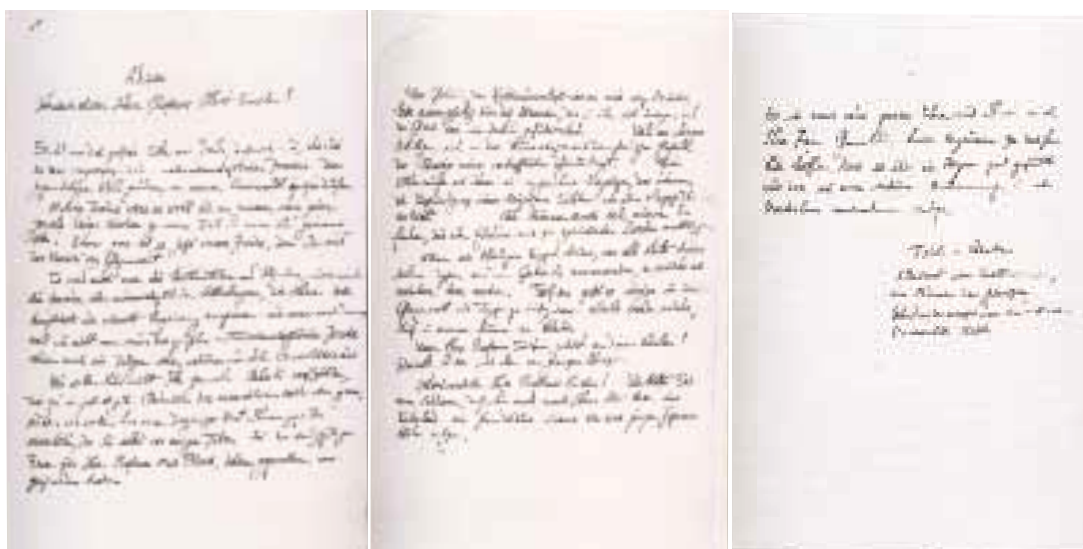
東京帝国大学でアインシュタイン博士を囲んだ記念写真。当時の一流物理学者が勢ぞろい。後方に荒木先生らしい人物の顔があるが、確認できない

帝国大学教授) 相対論の研究の第一人者で歌人としても知られる石原純(東北帝国大学教授)、物理学者で科学史の大家である桑木或雄(九州帝国大学教授)、さらに社会運動家の賀川豊彦の姿があった。

博士は一般講演として大正11年11月19日の慶応義塾大学中央大講堂での第1回講演を皮切りに東京、仙台、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡で計8回、「私はいかにして相対性理論をつかったか」「物理学における空間及び時間について」などのテーマで真摯な態度で聴衆に語りかけた。また専門家向けに、東京帝国大学物理学教室中央講堂で6回の特別講演。そのかたわら音楽を愛し、ピアノ

を奏で、日本の伝統芸能や社寺建築に尽きない興味を示した。穏やかで、飾り気のない人柄が、接触した多くの人たちに親しみを覚えさせた。

巨人の姿に魅了された京都帝大生の先生は、天文学への思いをたぎらせながら、その一方で音楽の道に、一層の興味を向けはじめた。昭和4(1929)年、ドイツ留学中に博士と再会し、親しく指導を受けるころには、暇をつくってはオペラ座に通う、いっばしの音楽通になっていた。「アインシュタイン先生は、京都帝国大学でドイツ語で挨拶した私のことを良く覚えていて下さいました。」先生はのちに随筆のなかで、嬉しそうに綴っている。



京都帝国大学生を代表したアインシュタイン博士歓迎挨拶(独文)の原稿

歓迎の挨拶

心より尊敬するアルベルト・アインシュタイン先生！ 現代の自然科学者の中でも最も高く譽れている先生を我が大学にお迎え出来たことは我々にとって最高の栄誉であり喜びであります。かの天才アイザック・ニュートンが、その当時に我が国を訪れたとすれば、その喜びは如何ばかりであったかと思うのでありますが、現代のニュートンである先生を今ここにお迎えした我々の喜びは、それにも劣らないものがあるのであります。先生を熱烈に心をこめて歓迎するものは、独り数学者および物理学者のみならず、自然科学の全分野にわたる学者および研究者であります。それは先生が偉大な自然科学者でありになるのと同時にまた、美しくそして高貴な人間性をお持ちになっておられるからであります。私はここで、人間の洞察力から生まれた素晴らしい創造物である先生の天才的なお仕事について申上げるのではなく、数年前にマックス・プランク教授60歳誕生祝の席で、先生ご自身が教授に対して仰った言葉を再び述べさせて頂きたいと思ひます。

自然科学という建物は非常に複雑なものであります。そこで活躍している人も、人間をそこへ導く精神も、共に変化に富んだものであります。多くの人々は、優れた精神力を持っているという喜ばしい感情をもって学問に参加しています。学問というものは彼等にとって、力強い体験および彼等の自尊心に満足感を与える楽しい喜びであります。我々はまた自己の目的のみに脳を使う他の多くの人々を見出すことも出来ます。もし聖なる天使がやってきて、これ等両タイプの人々の総てをこの建物から追放したとすれば、それは殆ど空虚なものとなるでしょう。それにも拘わらず過去から現在において、自分の心の奥底に留まることが許される少数の人が残ることになるでしょう。我がアインシュタイン教授は正にこのような人々のお一人であり、それ故にこそ我々は先生を心より敬愛するものであります。

心より尊敬するアインシュタイン先生！ 最後に、ご帰国後も、我々日本の若き学徒のために温かい指導者であり続けて頂くことをお願い申し上げます。先生ご夫妻をここにお迎え出来たことは我々にとりまして非常に大きな光栄であります。また、日本がお気に召し、良き想い出としてお国へお持ち帰り頂ければ幸いと存ずる次第であります。

大正11年12月14日

京都帝国大学学生代表 天文学学徒 荒木 俊馬

5 ショーペンハウエル



ショーペンハウエル

天文学と「シヨ哲」

夜久野の隠棲時代の日記によると「夜シヨ哲」という記述が、数年間にわたって続く。長男の雄豪は『シヨ哲... なつかしい言葉ですね。父はショーペンハウエルに傾倒して、晴耕雨読の日々をショーペンハウエルの著作に読み耽っていました』と解説する。「シヨ哲」は19世紀の哲学者アルトゥール・ショーペンハウエルの書物を読んだことを簡略化した先生の造語であった。

主著『意志と表象としての世界』から最後の著書『パルエルガ ウント パラリボメナ』に至るまでの著書について『原文で読んでいた』(雄豪)という。専門の天文学の分野では、アインシュタインやエディントン、マクスウェルの著書を永年にわたって熟読したが、研究領域としては畑違いとも思われる哲学の分野で、ひとりの著書を数年間にわたって読み続けた事実は、ただごとではない。

『世界は意志の自己認識である』『私の形而上学は物理的諸科学(形而下の諸科学)と実際に共通の接点をもつ唯一の形而上学である』(著書『自然における意志について』)と述べたショーペンハウエル。先生は、どのような点に関心を向けてシヨ哲を追い求めたのであろうか。

自然科学、とくに物理学について、ショーペンハウエルは、わが哲学は経験諸科学によって確認されている、と述べている。生理学と病理学、比較解剖学、植物生理学、物理天文学、言語学... いろんな科学の領域がある。とくに物理学をはじめとする自然科学は、『そのすべての分野でそれ

ぞれの道を進んで行くうちに、最後にどうしても解明できない一点にたどりつくことになる。まさにこの点こそが形而上学的なものである。自然科学はそれ自身には超えることのできない限界のあることを認め、そこにとどまり、そこから先を形而上学に委ねる』という見解を示すのである。(『ショーペンハウアー』遠山義孝著・清水書院から抜粋・引用)

シヨ哲によれば、近代の自然科学の進展によって自然科学と形而上学(哲学的な思考とってよいであろう)の結合点が、わが哲学に近づいて来たと言う。

宇宙は神秘の世界である。

天文学者の前には数限りない謎が次々に浮上してくる。極微の世界が、大宇宙の構造を写しているのではないか。無のなかの一点から誕生した宇宙が膨張を続けているという。宇宙を支える精緻な法則の存在。実証の難しい問題を抱える天文学はとりわけ『どうしても解明できない謎』のなかをさまよう。観察を重ね、高等数学を応用し、物理学のさまざまな法則を駆使して、真相を追い求める日々。謎に満ちた世界が、あたかも宇宙が膨張して行くように、広がって行くのである。自然科学者が、哲学に魅かれる理由であろう。『「そこから先」の解明は、こちらの側にある』という形而上学の声にひき込まれないわけがない。

先生は終戦の日、これからの人生をいかに生きるべきか、に思いを巡らせた。とにかく、これまでの人生、生活を引き継いで行くことはできない。その思いで隠棲した。「沈思の時」は苦悩の時代であった。

『われわれは苦悩のなかに生を受けている(ことをはっきりと宣言し、そのうえで)人間の一生は苦悩の歴史である』と規定し、覚めた目でこの世のなかをみつめたシヨ哲である。そのころの先生の悩みと同じ地平からの視線であった。共感がなかるうはずがない。人生の節目にさしかかった先生にとっては、シヨ哲の持論に同調するところが少なくなかったであろう。

シヨ哲によると、ひとの根本になる思想は30代までにできあがる。若者は直観によって物の核心を捉えることができる。にがりのない眼であらゆるものを観測できるというのが青少年時代の特質であり、その特質を生かして「本質的なもの」を考える特権をもっている、というのである。30歳のショーペンハウエルが年長のゲーテへ宛てた手紙

のなかでも「人間にあっては30歳、せいぜい35歳までに、世界から受ける印象によってその人の可能な限りのすべての思想が呼び起こされる。それ以後、彼が提供するものは、すべてこうした思想の発展にすぎない」というエルヴェシウス(フランス啓蒙期の哲学者)の意見にまったく賛成です」と伝えたという。(前掲『ショーペンハウアー』から)。精神の骨格は、青少年期に出来上がる、という先生の持論と酷似していることに気づくのである。

「永遠の現在」を生きる

ショーペンハウエルの著書としては、生前に唯一のベストセラーになったパルエルガのなかの『生活の知恵のためのアフォリズム第六章』でも『ひとの一生の最初の40年間、つまり30代までは、本文を提供する時期であり、続く30年間はこの本文に対する注釈の時期といえる。この注釈が、本文の真の意味と脈絡を、本文の含む教訓とこまやかなニュアンスとともにはっきりとわからせてくれる』という見解を示している。

シヨ哲のいう「注釈の時期」に入っていた先生にとって、これからの人生の指針について示唆を受けるところが少なくなかったことであろう。シヨ哲の思想に共感を覚えた、というような感想を書きとどめるような先生の性格ではない。日記を精査してもひとことの共感めいたメモもない。しかし、ひたすら先生は「シヨ哲」を読み続けたのであった。

晴耕雨読のなかに、時は流れ去って行く。時間の流れについて『げに不思議なもの』と嘆息する先生。専門の天文学の研究と並行して、シヨ哲に打ち込んだ。

ショーペンハウエルの哲学においては現在こそは、厳として存在して動かず、確固としたものであり、最も移ろいにくいものである、生命のあるものにとっては「現在」だけが確実なのである、とする。時間は一刻も休まずに流れて行くが、「現在」は流れのなかにそびえる巖^{いわお}である、生まれる前のこと、死のあとのことを調べる必要はない、現在を知ることだ、「意志のあらわれである生は、永遠の現在」であるという。「世界は意志の自己認識である」と喝破したショーペンハウエル。「いまを生きよ」という宗教的な教えにつながる意味を秘めているようである。

人生の再出発の意味を引き出そうとする先生の前に、ショーペンハウエルの哲学があった。

ショーペンハウエルの主著『意志と表象として

の世界』は、先生が原文で読了したのであるが、1819年の発刊後、1年半で100冊しか売れなかったという。しかしこの書物は、しだいに注目をひいて行き、現在もお再版を続けるロングセラーになっている。ドイツ文の名文として、わが国でも教科書に引用されることが少なくない。

この書物は巷の関心を初めはひかなかつたが、ゲーテの評価は高かった。贈られた、その分厚い本をまず二つに切り離して読み易いようにして、本の上に覆いかぶさるようにして座り込み、熱心に読み始めたのであった。ゲーテはショーペンハウエルとの間に、心の琴線に触れる思いを抱いたのであろう。しばしば招いて、哲学について意見を交わしている。ショーペンハウエルは「今世紀の真に光栄ある誉れであり、ドイツ人の誇りであり、あらゆる時代の人々の口にのぼるであろう大ゲーテが、この私に友情を示してくれる」と喜び、終生、変わらない尊敬を隠さなかったという。

色あせた原稿用紙の束が先生の書齋から逝去後四半世紀経ってみつかった。紙こよりで丁寧に綴られている。巻頭は「さまよえるオランダ人」となっている。ワグナーのなかでも最も知られている歌劇と同じ題名である。天文学の論文の書き損じらしい原稿用紙の裏を利用して書かれた内容は、ハインリッヒ・ハイネの原文を先生が邦訳したものだということが、文中の解説で判った。書き損じの原稿の内容から、夜久野時代の作品と推測された。

この歌劇の台本もまた、先生とショーペンハウエルをつなぐ意味をもっていた。

豊かな文才と思想をゲーテに愛されたショーペンハウエルの周りには、晩年になると、芸術家たちが集まって来た。音楽への造詣の深さは、よく



ワグナーの「さまよえるオランダ人」の歌劇台本は先生の書齋に大切に保存されていた



ドイツ留学時代にみたオペラの観劇パンフを綴じて製本し、先生は後年まで大切に保存していた

知られていた。『音楽は至るところで理解を得ることのできる真に一般的な言語である。そのため音楽はあらゆる国で、すべての時代を通じて、熱心にたえず話題にされて来た。旋律は頭脳に対しては何も語りかけないが、心に対しては多くのことを語りかける』(ショーペンハウエル)

ショーペンハウエルはあるとき、ワグナーの「さまよえる(天翔ける)オランダ人」を観劇している。生の否定によってもたらされる救済というテーマは、まさにショーペンハウエルの思想に重なっていたことはたしかである。しかしショーペンハウエルは、ワグナーについて初めは高い評価

を与えなかった。『ワグナーほど、ショーペンハウエルの「音楽の形而上学」を深く理解して自らの血肉にした芸術家は他にいないであろう』(前掲『ショーペンハウアー』から)と言われるまでにショーペンハウエルに傾倒したのであった。

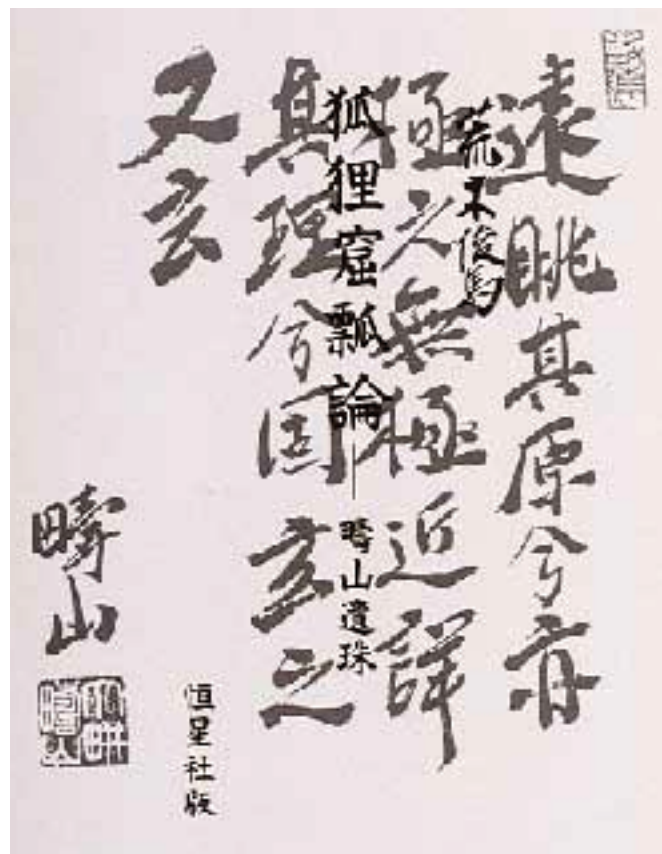
昭和の初年、ベルリン留学中の先生はこの「さまよえるオランダ人」を観て、感激して、妻京子に「すばらしい」と絶賛した便りをのこしている。それからざっと20年経った夜久野時代に、シヨ哲を読み、ショーペンハウエルを敬愛したワグナーの歌劇を、自然の風物のなかに沈潜しながらコツコツと翻訳に精を出す先生の姿をみるのである。

先生は随筆(『狐狸窟瓢論』第三部 夜久野隠棲余駄文)のなかで、次のように言っている。科学は善悪を超越し、人倫道德と何らの関係もないはずである。しかし不思議なことに、古来、偉大な科学者で、まことに悪徳な人間はほとんどいない。人格高潔の士ばかりである。恐らくは不純な精神をもって科学を研究しても、大きな真理を発見することができないからであろう、と言う。

これは『真理は娼妓ではないから、本当にそれを愛しない人に、しなだれかかりはしない』(ショーペンハウエル)という箴言そのものである。ショーペンハウエルに親しんだ先生の思考回路の一端を示しているといつてよいであろう。



先生の没後に出版された随筆集『狐狸窟瓢論—曠山遺珠』(上巻)、その扉の先生の筆跡(右)



カントに魅かれる

数年間にわたるシヨ哲の読書体験が、先生の精神の骨格に、どのような影響を与えたのか。俊馬日記や随筆集に触れられていないため、それを知るすべはないが、先生が大変に興味をもって青春時代に熟読したほかの哲学者の著書としては、カントやヤスパースも挙げるができる。

『カント全集』第10巻付録の推薦文として先生が執筆した「カントと私」によると、先生は青春時代に天野貞祐訳『純粹理性批判』を読み、意味のよくわからない所があったので *Kritik der reinen Vernunft* の巻を原著で読み、哲学的思考力を得たようであると述べている。さらに、カントの *Schriften zur Naturphilosophie* を京都の古本屋でみつけて熟読し、カントの研究の大部分が物理、天文、地学など自然科学に関するものであることを知って、意外の感をいだきながらも感動する。さらに先生の研究に直接かかわっているカントの『太陽系生成論』の星雲説に強い関心を持っていたのである。



自然科学の造詣の深かったカント

夜久野時代に、星雲説を含む *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels* を『カント・宇宙論』として、先生は出版している。偉大な天文学者は哲学者に魅かれるようである。

6 トインビー

人類の未来を見た哲人

大学というものは学術の授業、研究の指導を通じて人間形成を目的とする最高の教育機関であり、しかも現代の学術は国際的であるから、各専門分野の世界的権威の業績を講義や著書を通して学習させるだけでは十分でない。直接、面と向かって、その人の風貌と響けに接することによって、学生は深い感銘を覚え、真理探究の心がわき起こるに違いない。それによってこそ大学教育の効果があがる。俊馬先生は、開学のあと、世界の著名な学者を大学にたてつけに招いた動機をこう語っている。

学生、教職員は新設大学への碩学の来学を喜び、一挙手一投足も見逃すまい、碩学のエキス一滴をもわがものにしたいとの思いで出迎えた。なかでも、俊馬先生が最も力を入れて招聘し、自らの人生の指針を与えられ、敬愛したと思われる人物がアーノルド・ジョセフ・トインビー博士(イギリス)であった。

昭和42(1967)年夏。世界的な歴史学者であり、人類の未来を見透かす巨人としての博士のもとに、先生は赴いた。ロンドン・セントジェームズ・スクウェアのチャタムハウスにある王立国際

事情研究所。気軽に席を立て握手するトインビー博士の飾らない態度に感動し、そのあと目を見張った。

通路から室内にかけて天井まで届くほどの書籍、さらに隣室の机や台の上、床の上にまで何万冊かわからない世界各国語の書物がうず高く積み重ねられていたのである。ラテン語、ギリシャ語の読み書きができ、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語をほぼ母国語と同じように使うことができる。オランダ語とフランダース語を理解でき、トルコ語、アラビア語も読み理解できる。という語学の天才トインビーならではの蔵書であった。

たちまち、うちとけたトインビー博士は、日本行を快諾した。そのあとのひとことに、先生はもう一度しびれるのであった。

「1929年、1956年の2回、これまでに日本を訪問したが、1956年のあと、日本は異常な経済発展を遂げましたね。この10年間に、日本がどう変化したか、この眼でたしかめたい。“日本伝来の古い面”と“現代日本の新しい文化の面”をみたいし、この新旧両面がいかように調和しているか、私の眼でみたい」という。

「科学者だなあ。感動した。功なり名とげた世界的な歴史学者がなお、猛烈な意欲をたぎらせ



先生はアーノルド・トインビー博士に私淑した

て、経済大国日本に関心を抱いているのである。書物や文献に頼ることに満足せず、機会さえあれば世界各国の社会の現状を直接、自分の眼で詳細に観察してたしかめ、研究の資料にしたい、という真理探究の精神に触れたのである。

俊馬日記からトインビー博士の来日中の行動(昭和42年)を追ってみると、実にエネルギッシュな学究の姿がかいまみられる。まさに「この姿を学生に見てほしい」という碩学招聘の原点が描かれている。

精力的に過密な日程をこなすトインビー博士の未知なものへの限りない興味と関心の眼に打たれて、先生もまた博士の学問への情熱を酌みとろうとするかのように、ぴったりと寄り添い、同行したのであった。

日本の高度経済成長を象徴する人物との懇談の機会を得て、質問を次々に放つ博士。その一方で、宗教人との懇談も大切であった。東京都内の赤羽団地見学は圧巻であった。土曜日の昼過ぎ赤羽着。

くもりときどき雨のうすら寒さをものともしない博士。

『小学校訪問、放課後でまばら。居残りの教諭の号令で集まった子供たちと対話、博士夫妻大いに満足。12号館609溝端多恵子方(3DK)。マーケット。39号館113油井昭三郎方(2DK)。20号館308田崎方(3DK、子供2人)。6号館203林佐喜智方(1DK)。診療所。52号館605今井則和方(4DK)』(昭42.11.11 俊馬日記)

この赤羽団地見学は、この朝、東京都内の高層建築と立体高速道路、そして緑が異常に少なくなった大都会東京の変容に驚いたトインビー博士の急な要望であった。トインビー博士は、世界第一の人口をもつマンモス都市に即応する一般市民の新しい生活様式は、どんなものだろうかという率直な疑問を持った。その新しい住居の状態を見たい。金持ちの大住宅ではなくて中産階級、知識階級、サラリーマンといった人たちについて、住居の広さ狭さのなかでの暮らしぶりを見たいという

のであった。

トインビー博士によって『警咳に接し感銘をうけ、真理探究の心に触れて、教育効果あらしめ』られたのは、実は先生自身であったかも知れない。歴史学者として、世界の最高権威である。ケタはずれのスケールの大きな思想家でもある。西洋流の解析的な考え方だけではなく、論理学とか弁証法といったものを超越して、深く鋭い洞察力、直観力によって、人類の将来を見通す予言者的な存在。先生は博士をそのように評価した。『とくに西洋文化に対する、かつて西洋の学者があえて試みなかった真剣な反省批判と、東洋文化への深い理解ならびに高い評価とは、私に異常な感銘を与えた』と述懐するに至る。80歳を超したトインビー博士の柔軟な思考は、8歳若い先生に大きな影響を与えた。

博士の頭は柔軟であった。『歴史の研究』によって、名声を得た博士に対して、歴史学者たちのなかからさまざまな批判の矢が放たれた。60歳を過ぎて、それらの批判をじっくりと吟味した上で、1年余にわたって世界旅行に出て、自説に再検討を加えようとした。立論の前提を掘り下げて、根本的な欠陥があれば修正すべきであると考えたのである。2度目の来日はもちろん、この時代であった。そのとき、日本史や中国史の専門家たちと会合15回、日本文明について質問を続けた。その旅行のあと「再考察」の執筆にかかったのが69歳。出版して体系を大幅に修正したのは72歳のときである。それを思えば、博士に感銘を受けた俊馬先生はまだ70歳であった。

日本の美しい伝統的精神を尊重した人づくりを進めるといふ建学の精神は揺るがなかったにしても、世界を見る眼、国際平和への視点や日本の国の行方について、俊馬先生の心に変化の兆しがある。それは入学式、卒業式での先生のことばの動きにみることができる。

トインビー博士に対して巣立ったばかりの京都産業大学は全学を挙げて歓迎した。『トインビー博士来日、初講演 京都産業大学「未来の世界像と文化」若い聴衆2,000人に感銘 透徹した史眼文明論に肅然とききいる めい想忘れるな 科学技術進歩の中に』。昭和42(1967)年11月17日付京都新聞は、第14面のトップ記事として、京都産業大学での講演を詳細に掲載している。当時は男子学生は黒の詰め襟服の時代。先生の先導で博士が壇上にあがると、ほとんど黒一色の場内から歓迎の熱烈な拍手がわき起こった。

入りきれない学生、教職員のために別室にスピーカーが据えられ、ここにも1,000人。トインビー博士は、この来学で親しくなった若泉敬教授との対話を毎日新聞紙上で97回にわたって長期連載(昭和45年8月から)し、日本の心に新たな視点の文明論を訴えかけた。のち共同著作の『トインビーとの対話 未来を生きる』(毎日新聞社1971年、講談社1977年)に結実した。

その序文でトインビー博士は『親しい友人である若泉教授と、この計画に理解と援助を惜しまなかった京都産業大学に深い感謝の念を捧げたい。この対話は、若泉教授が思い立ち、非常な努力を



京都産業大学に着いたトインビー博士夫妻は熱い拍手に迎えられた。右端の後ろ姿が荒木先生



会場(本学旧体育館)は超満員だった



トインビー博士と若泉教授の共著『トインビーとの対話 未来を生きる』

払った結果、実現した。この対話は過去から現在に至る人間の問題について、生涯、好奇心を燃やし続けてきたひとりのイギリス人が、日本の若い世代のもつ問題を取りあげたひとりの日本人に答えようとした試みである。これらの質問はひとりの日本人から発せられたものではあるが、同じような質問が世界中の伸びつつある世代から提起されている。なぜなら、日本の若い世代は、世界の若い世代のスポークスマンであるからだ。このことは新しい現象であると考え、1世紀前、否、半世紀前ですら、日本の人々と西欧の人々とは同じ目で世界をみなかっただろうし、そして彼らが尋ねた問題も同じでなかったであろう。しかし、今日ではわれわれは同じことを考え、同じように感じている。なぜならば、われわれは共通の問題

に取り組んでいるからである。

「われわれ人類はいかにして未来を生きるか」というすべてを包括する一つの問題から派生している(要約)と述べた。

世界をひとつの眼でみる時代に入った。それは、俊馬先生にとっても、新しい飛躍の時代を迎えたことを示すものであった。

終生の交遊

京都産業大学報第53号(昭50.12.1)の『本学学事顧問アーノルド・トインビー博士の逝去を悼む 総長荒木俊馬』のなかで、先生はトインビー博士との交友を振り返って、昭和42年以来、本学学事顧問として大所高所からの助言と指導を受けることができた、と感謝の言葉とともに深い悲しみを述べている。

昭和46年7月から10月にかけて先生は世界交流の地ならしの目的でイギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、マルタ共和国、アメリカを回ったのであるが、初日、パリにいったん着いたあと、ロンドンのヒースロー空港へ向かった。いうまでもなくトインビー博士との再会の楽しみからであった。博士は、夏のバカンスでノースイングランドのキーリントンの山荘に滞在中であった。ハイドパーク前のホテルで一泊した翌朝、自動車を雇って北へ。パーミンガムを通り、リバプールとマンチェスターの中間を抜けてランカスタ



トインビー博士を紹介する先生



日本中が博士の話に注目した(国立京都国際会館)

一の工場地帯からヨークシャーのセドバーグで一泊。次の朝がキリントン行である。

牛と羊の牧場がひろがり、ひと気のない丘陵の谷間を走る。地質学で有名なカンブリア系の片岩地帯である。農家を訪ね、行きつ戻りつしていると、突然、石造りの二階建の小屋の玄関が開いて、トインビー博士が手をあげている。京土産を渡しながら「京都産大の現状」「中国問題」「トインビー博士の親友でもあるレイモン・アロン教授(フランス)の話」など、シェリー酒をのみ干すヒマもないほど話がはずんだ。



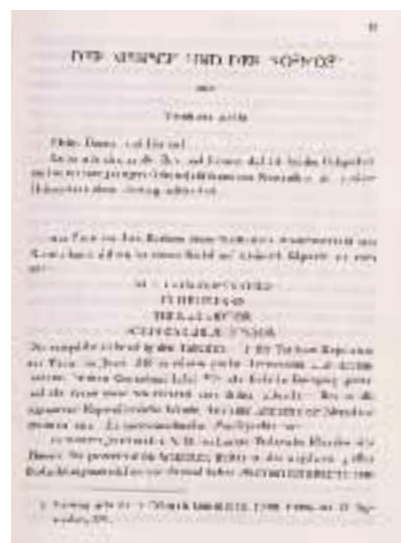
トインビー博士逝去。淋しさに沈んだ荒木先生の追悼文(昭和50年12月の京都産業大学報)

博士「わざわざ訪ねていただいたのに何のおもてなしもできなくて恐縮」

荒木先生「トインビー博士がいらっしゃるから、これが最高のおもてなし」と、和やかであった。門の前で記念写真を撮り別れを告げた先生であったが、門の石はカンブリア紀の珍しい片岩でつくられている。学問的好奇心に満ちた先生にとっては、またとない科学資料である。記念に持ち帰ろうとして大きな石と格闘していると、家のなかから再びトインビー博士が出て来て、にこやかに見守ったのである。

再会を楽しみの別れ。昭和48年夏に、先生は脳血栓で倒れ、その秋、渡欧したもののポーランドでコペルニクス生誕500年記念の会議で記念講演(「Der Mensch und der Kosmos」)したが、寄り道しないで帰学し博士を訪ねることができなかった。

そして昭和50年秋、トインビー博士は亡くなったのであった。やさしいペロニカ夫人を慰めたい。昭和51年5月、渡英した先生はヨーク市の北北東60キロの小さな町ガンスローブに、夫人を訪ねて一緒に墓参し、永遠の別れを告げた。



先生はコペルニクス研究の権威でもあった

荒木先生の名講義 昭和4年、俊馬先生は2年間の欧州留学に出掛けたが、その前年には「天体力学」の講義終了後の夏休みに、量子力学を15回にわたって集中講義している。ド・ブロイ、ハイゼンベルクおよびシュレジンガーによって構築されたばかりの量子力学について、先生は最新の論文を読み解きながら徹夜で講義案を練っていた様子が俊馬日記にみられる。「対談 ふたりが学生だったころ 朝永振一郎、湯川秀樹」(『図書』1982.10 岩波書店)によると、ノーベル物理学賞を受けた朝永、湯川の両博士らが、物理学科の学生時代に、俊馬先生にせがんで、当時としては最新の量子力学の講義をやってもらったらしい。おそらく、これが本邦初の量子力学の講義であったと思われる。『湯川』私が三年生のときで、荒木助教授は新進気鋭。ちょうど量子力学が現れたときで、ひじょうに印象が強かった。朝永「名講義だった。ボクも印象に残ってる」 湯川「なかなかロマンチックにおやりになる。それでボクらは大いにアジッタわけやね。量子力学を(そのときからずっと)やるつもりだったから」¹⁶ その湯川博士は本学の開学式典に出席、荒木先生の建学の功績を称えて本学の発展を願う祝辞を述べたのであった。



アインシュタイン塔